

広島大学総合科学部報

飛翔

第84号

～特集～
25総代・副総代に突撃！
広大で食べられるスイーツ☆
総科食堂の今

広島大学
総合科学研究科・総合科学部
広報・出版委員会
飛翔編集委員会

<目 次>

○巻頭言	2
○研究室紹介	4
○特集1 25総代・副総代に突撃!	17
○特集2 広大で食べられるスイーツ	20
○OB・OG紹介	23
○特集3 総科食堂の今	27
○レビュー×レビュー	31
○飛翔な日々	33
○編集後記	42

巻頭言

総合科学と複合的 アイデンティティ



吉村 慎太郎
総合科学研究科
研究科長補佐

一、「奇縁」のなせる技

―戦地から平和都市へ―

私はイラン・イラク戦争の最終段階にあたる一九八七～八八年、イランの首都テヘランの日本大使館専門調査員として勤務していた。イラクによるミサイル攻撃、そしてクルド系住民に対する化学兵器使用を中心に、八〇年に始まったその戦争プロセスのなかでも、私が在任したこの一年半は、最も緊張と恐怖感に覆われた時期であった。特に、昼夜に関係なく降り注がれたミサイル攻撃は、改めて自分が戦時下にいることを認識させた。

ラジオから突然流れる空襲警報を聴くや、大使館の屋上にのぼると、上空での激しい爆音とともに補助燃料装置が切り

離された瞬間、きのこ雲や地響きへと続くミサイル着弾を幾度となく目撃した。内政や外交に関する情報収集が本来の私の仕事であったが、ミサイル着弾現場に直ちに駆けつけ、邦人被害の有無を確認し、それを本国に打電するのが、日常業務ともなった。そうした戦争の惨状は、今でも目に焼き付いて離れない。

「イラク戦争」と呼ばれたこの戦争の正式停戦を見届けた後の八八年一〇月、私は総合科学部に赴任した。その半年ほど前には、当時広島平和記念公園にも近い東千田町にキャンパスのあった本学総合科学部の教員となるとは、考えもしなかった。そういえば、八五～八六年に米国プリンストン大学大学院に在籍し、一年の奨学金が途絶え、授業料が払えずに一時帰国し、アルバイト気分から在イラン日本大使館で「にわか外交官」になったことも、そこで「戦中派」となってしまったこと、そしてイランやアフガニスタンを含む中東世界にそもそも興味を持ち始めたのも、奇縁（あるいは、「神の思し召し」としか説明できそうにない。こうした奇縁或いは偶然と、必然が織り重なり合いながら紡ぎだされる変転があるからこそ、人生は時に辛いのが、同時にこのうえなく面白いのだろうと思う。

二、所属の変転のなかで

広大着任から数え、ちょうど二五年が経過した。当初所属したのは、総合科学部に当時設けられていた七コースのうちの一とつ地域文化コースである。それから一二年後の二〇〇〇年、プログラム制への移行を機会に、環境共生プログラムへ、そして〇六年には社会文化プログラムへと、同じ学部内ながら所属が変わった。また、大学院は他のアジア関連の数名の先生方とともに、一九九五年から約一〇年ほど、国際協力研究科に籍を置いたこともある。それも考え併せれば、いっそう複雑である。

こうした所属の変転の度に、恥ずかしながら、所属先と自分との距離や関係性を常に自問しながら、仕事に従事してきた。特にそれを意識したのは、広大や総科以外の方に自分をどう説明すべきかという時である。自己紹介の時、名刺を渡せば済むという話ではない。自分の専門は何かをその際補足し、それと「総合科学」がどう関わっているのかも伝えねばならない。「総科には様々な分野の文系・理系の研究者がおり、…そして中東・イスラーム研究に従事する私もそのひとりです。」は、手取り早いようで、説明にならない。どこか自分を誤魔化しているような、ばつの悪さを正直感じていた。

三、複合的アイデンティティの形成

ところで、次のような論語（金谷治訳注、岩波文庫）の一節がある。

「子曰、不患人之不己知、患己不知人也、」

もちろん、これは他人が自分のことを分かってくれないなどと嘆くのではなく、自分こそがどれほど他者のことを分かっていないかをまずは懸念すべきだという意味だが、それは過去の自分と照らし合わせることもできるが故に、時に授業で紹介している。思い返せば、広大赴任から一〇年ほどは、無我夢中で教育・研究に従事してきたため、ある意味周りが見えずにいた。しかし、その後徐々にゆとりも生まれ、他者との接点も見えてきたように思う。それとの関わりで、意識したのが「複合的アイデンティティ」である。

以前から和食好きの「日本人」の自分が、いわゆる日本人一般とどこか違うとは考えていた。その違いは今思うと、長年民族や宗教、そして国籍を超えた様々な交流が繰り返されてきた中東との付き合いから育まれてきたものだと考えている。実際、イランの言語（ペルシア語）に秀でているとは決して言えないが、イランに行くと、内心ホッと、適度な緊張感

に癒される。過去の「にわか外交官」、「戦中派」、そしてイラン現代史研究者、地域研究者などといった具合で、そこに広大や総科に対するアイデンティティを感じることは少なかった。しかし、周りが見え始めると、そうした帰属意識もすっかりと根付き、自身の内面性を有機的に形作っていることを自覚するようになった。どれもが今いる自分から引き剥がすことができないうアイデンティティになっているとさえ思う。

四、総合科学との関わり

このように、人生とは様々な出会いと経験を通じたアイデンティティの形成過程と置き換えられる。そこで生み出されるアイデンティティの複合性は、本学部・研究科の「総合科学」にも不可欠な条件のように考えられる。他者と対話し、他者に開かれた自己を常に磨いていく姿勢が、他の学問分野の成果を常に尊重・吸収しながら、新たな視点や問題解決の手法などを模索し、問題提起する使命を負った総科にこそふさわしいからである。逆に、他者との対話に消極的で、内向きの総科アイデンティティがあるとすれば、それは、直ちに「ヒトリヨガリティ」（私の造語）とも評されよう。

本学部は様々な専門に通じつつ、懐の

広い、外向き志向の教育・研究組織である。それを有効活用できるか、また今後学部・研究科としてどう発展していくことができるかどうかは、私たち一人一人のたゆまぬ知的欲求と努力にかかっている。だが、加えて他者との出会いから無限の可能性と自己の可変性を追求する姿勢こそが肝要であろう。さらに、総合科学のあくなき前進という観点から言えば、「子曰、不患人之不己知、患己無能也、」に見られる謙虚さも、持ち併せねばなるまい。総合科学とは、人間の成長と同様、他の学問分野とのたえざる出会いや、時に緊張を伴った関係を通して自らを再発見し、また再構築し続けていく分野だから、そこにおごりは無用であると思う。

私たちが所属する総合科学部は既存の学問体系が単独では容易に克服の道筋を見出すことが困難な現実の要請を受け創設された。以来、四〇年が過ぎようとしている今、私たちは混沌とした時代に生きていく。未来が不確かな時代だからこそ、本学部は決して惑うことなく、複合的な学際アイデンティティをこれまで以上に堅持し続けていくことが求められている。そして、総科生にも何より積極的に自らの複合的アイデンティティを構築する努力を忘れずにいてもらいたい。